

診療に用いる放射線について

あなたが受けられる検査では、病変の状態やからだの機能を調べるために放射線を使用します。放射線を用いることで、診療において有益な情報を得ることができますが、放射線のからだへの影響(確定的影響、確率的影響)が無いわけではありませんので、ご説明します。

確定的影響:比較的高線量(0.1～数Gy(グレイ)以上)の被ばくをしない限り発生することはありませんので、通常の放射線検査では安全です。大量の放射線を受けるときに生じる影響としては、皮膚障害、胎児発達障害、急性放射線症などがあります。

確率的影響:200mSv(ミリシーベルト)を超える放射線量で、その線量に比例して増加すると考えられている影響で、がん発症、遺伝的影響が含まれます。ただし、100mSv(0.1Sv)以下の低線量被ばくでは、他の要因(生活習慣など)による発がんの影響に隠れてしまうため、放射線による発がんのリスクは明らかになっていません。また、逆に、「100mSv以下の放射線被ばくは、生体を刺激することによって発がんの減少や寿命の延長をもたらす」という研究成果も見られるようになってきています。

CT検査:からだに影響が出るといわれている放射線量よりもはるかに少ない線量を必要な場所だけに限定して使用しますので、放射線による影響を心配されることはありません。

<当院における一般的な放射線診療における被ばく量 【検査の内容により幅があります】>

CT検査 頭部 1.47mSv、胸部 6.21mSv、腹部 12.36mSv

当院では厚生労働省が定めるガイドラインに沿って「診療用放射線の安全管理に係る体制」を整え、検査を受けることによる利益が不利益を上回るかどうかを検討の上、必要性があると判断した場合に放射線診療を行っています。

また、放射線診療部門においては「検査目的に最適化した放射線診療の管理」にも努めています。今回の検査を受けられた場合、より適切な診療を提供するための情報を得ることができます。検査を受けられなかった場合は、必要な情報が得られず、適切な診療を提供できなかったり治療の遅れが生じる可能性があります。

私は検査を受けるにあたり、上記の説明を理解しました。

患者氏名 _____ (_____ 年 _____ 月 _____ 日)

代理署名 _____ (患者との関係: _____)

名古屋市立大学医学部附属リハビリテーション病院

名古屋市総合リハビリテーションセンター附属病院2020.04.01